

西行四国行脚の旅程について

佐 藤 恒 雄

はじめに

西行の生涯に一時期を画する四国行脚とその意義については、川田順⁽¹⁾、三好英二⁽²⁾、窪田章一郎⁽³⁾、久保田淳⁽⁴⁾、川村晃生⁽⁵⁾らの諸家に説くところがある。『山家集』に散在する歌の詞書を専らの材料としてその経路がたどられ、同時にそれらの歌によって西行内面の深まりの軌跡が追尋されてきたのである。久保田氏が、

このように、この中国・四国旅行は、単に崇徳院の墓参と大師の遺跡巡りという、所期の目的を達したに止らず、自己の存在、更に広く人間存在を、具体的に考える機会となったと思われる。その意味で、「私かに按ふに廿三歳の出家と五十歳の四国行脚とは、人間西行の転期を画する二つの最要事柄であった」という川田氏の表現は、いささか言い過ぎの気味があると思うが、同氏が語を継いで、「人間西行は此の行脚によって一段と深化し、同時に、必然の結果として歌人西行も一倍偉くなった」と述べられるのには賛意を表したい。三好氏も、「人間性完成期に於ける西行の、更にそれをより深化せしめる一契機となった意味に於いて、彼の四国行脚は看過しがたい重要な意義を担うものと考えたいのである」と論ぜられた。この旅に関する私見も、ほぼ同様の所に落着くのである。

と、先行諸家の説を引きあいにもとめられた西行伝記上に本旅行がもつ意義については、異論の余地なく、これ以上につけ加えるべきものは何もない。しかしながら、この旅行の経路と歌詠の順序に関しては、前記諸家の説とはかなり異った見解を持つに至ったので、そのことを提示して、大方の批正を得たいと思う。

以下、私見による順序に詞書と歌を配しながら、その根拠を明示し、先行説否定などに及びたい。『山家集』の本文は、『西行全集』所収の陽明文庫本に拠り(横組みの関係上、2字以上のおどり字のみはそれぞれの字に開いて示した)、必要に応じて他の所伝を記すこととする。

1

出発に先立ち賀茂社に参拝奉幣したところから、この旅行は始まる。

そのかみまいりつかうまつりけるならひに、世をのがれてのちも、かにもまいりけり、としたかくなりて、四国のかたへ修行しけるに、またかへりまいらぬこともやとて、仁安二年十月十日の夜まいり、幣まいらせけり、うちへもいらぬ事なれば、たなうのやしろにとりつぎて、まいらせ給へとて、心ざしけるに、このまの月ほのぼのに、つねよりも神さび、あはれにおぼえてよみける。

①かしこまるしでになみだのかゝるかな 又いつかはとおもふあはれに(1095)
 出発の年次については、ここにいう仁安2年説と3年説の両説があって、決して難しい状態にある。ことは久保田氏が整理しこと分けて詳論されているので、それに譲りたいが、ただ後述するとおり一冬を越し越年した旅であったらしいことが、つまり2年から3年にかけての旅であったことが、このような所伝の混乱を惹起したのではないか、との全くの臆断をあえて提示しておきたいと思う。

①の歌が詠まれた10月10日の参拝直後に、西行は出発したと思われるが、おそらく、淀川を下り、山城国美豆野から摂津山本(又は明石)を経て、播磨路に入り、野中の清水を一見して、飾磨の津か室津あたりの港に至ったものと推察される。すなわち次の歌々によってかく考えるのである。

西の国の方へ修行してまかり待けるに、みづのと申所にぐしならひたる同行の侍けるが、したしきものゝ例ならぬ事侍とて、ぐせざりければ

②やましろのみづのみくさにつながら こそものうげにみゆる旅哉(1103)

津の国にやまもとゝ申所にて、人をまちて日かずへければ

③なにとなくみやこのかたときくそらは むつましくてぞながめられける

はりまの書写へまいるとて、野中のし水をみける事、ひとむかしになりけり、としへてのち、修行すとてとをりけるに、おなじさまにてかはらざりければ

④むかし見しのなかのし水かはらねば わがかげをもや思出らん (1096)

四国の方へぐしてまかりたりける同行、みやこへかへりけるに

⑤かへりゆく人のころを思ふにも はなれがたきは都なりけり (1097)

ひとりみをきて、かへりまかりなんずるこそあはれに、いつかみやこへはかへるべきなど申ければ

⑥柴のいほのしばしみやこへかへらじと おもはんだにもあはれなるべし

(1098)

②の歌詞書の「ぐしならひたる同行」が西住を指し、美豆野で落ちあって同行する予定のところ、近親者の病気というアクシデントによって同行不能となった、とみる点で諸家の説は一致し、私も同様に考えたい。

③の詞書の「津の国にやまもと」は、板本では「あかしに」とあり、地名を異にするが、何れかの地で、再度同行する旨の連絡を受けた西行が、追ってくる西住を待っていた時の詠作であり、この点も諸家の説は一致し、私も異論をもたない。

④は、川田氏のみがこの旅の途次の歌とみる。「としへてのち、修行すとて」とのみあって、「四国の方へ」の語を含まぬことから、別の折のものであった可能性もなくはないが、①歌にすぐ続いてあり、④⑤歌に連続する連関からみて、この時の詠作と考えてよいのではあるまいか。三好氏は、初回の中国筋旅行の年時を考究する文脈の中でこの歌をとりあげ、西行法師家集の編成では①の歌とは大きく離れて配されていることなどから、川田説に疑問を投げかけている。しかし、「としへてのち」の西国への修業がそう何度も考え難いことにかんがみ、私はこの途次に詠まれた歌である可能性をより大きく考えたいと思う。

⑤と⑥の歌は、川田氏は「明石で待合せた西住が来て、四国まで一緒に行脚したが、どういふ都合か一足さきに帰洛し、厳島や九州へは同道しなかった。多分、善通寺あたりで別れたのだろう」と述べ、三好氏も「西行が西住とどこで袂を別ったかは不明であるが、四国の善通寺巡拝までは行を共にしたらしく

思われる」といい、ともに善通寺あたりでの詠作とみている。窪田氏もまた同様の見解をとる。しかし、この歌の内容は、遠く都を離れた僻遠の地で詠まれたものとは到底考えがたい。「はなれがたきは都なりけり」に端的に表明されているように、これから都を離れるのだけれど離れ難いとの思いを抱くような土地、いわば心理的に未だ都の圏内であって、いよいよ僻遠の地へと向って踏み出す時の、後髪ひかれる思いをモチーフとする歌であるに相違ないからである。⑥も、「しばしみやこへかへらじ」と、都に惹かれる心を断ち切って、しばらくは帰らないのだと思いきり自分自身に言い聞かせるような気持、それすらがあらはれたと歌っているのであって、旅立ち前に賀茂社に詣でて、「またいつかは」との不安が心中に萌した、その懐いが揺曳しているように思える。以下に挙例してゆく四国関係の歌に、同行の影らしいものが全く窺えないことも、有力な傍証となるであろう。先覚三氏は、「四国の方へぐしてまかりたりける同行」の文言を忠実に受けとって、「四国まで」と読みとったのであろうが、「四国方面への旅に連れだつて都を出た同行」の意であると私は解する。西住はおそらく、山本か明石で落ち合い、播磨路陸行中を同行したものの、飾磨か室の津で（川田氏の推定説による）、西行だけが乗船し、西住はそこで別れて都へ帰っていったものと考えたい。

2

西住と別れ、一人船上の人となった西行は、瀬戸内海の本州岸に沿って西下し、備前牛窓の瀬戸を通り、小島に至った。

西国へ修行してまかりけるをり、こじまと申所に八幡のいはれたまひたりけるに、こもりたりけり、としへて又そのやしろを見けるに、松どものふるきになりたりけるをみて

⑦むかし見し松はおい木に成にけり 我としへたるほどもしられて (1371)

備前国に小嶋と申嶋にわたりたりけるに、あみ申物(ママ)とする所は、をのをのわれわれしめて、ながきさほにふくろをつけてたてわたすなり、そのさほのたてはじめをば、一(ママ)のさほとぞなづけたる、なかにとしたかきあま人のたてそむるなり、たつるとて申なることばきゝ侍しこそ、なみだこぼれて、

申ばかりなくおぼえてよみける

- ⑧たてそむるあみとるうらのはつさほは つみのなかにもすぐれたるこひ（「かな」ノ誤カ）

(1372)

ひゞ、しぶかはと申す方へまはりて、四国のかたへわたらんとしけるに、
風あしくてほどへけり、しぶかはのうらと申所に、おさなきものどものあ
またものをひろひけるを、とひければ、つみと申物ひろふなりと申けるを
きよて

- ⑨をりたちてうらたにひろふあまのこは つみよりつみをならふなりけり

(1373)

さぬきにまうでゝ、まつやまのつと申所に、院おはしましけん御あとたづ
ねけれど、かたもなかりければ

- ⑩まつ山のなみにながれてこしふねの やがてむなしく成にける哉 (1353)

- ⑪まつ山のなみのけしきはかはらじを かたなく君はなりましにけり (1354)

しろみねと申ける所に、御はかの侍けるにまいりて

- ⑫よしやきみむかしのたまのゆかとも かゝらん後は何にかはせん (1355)

さぬきのくにへまかりて、みのつと申つにつきて、月あかくて、ひゞのて
もかよはぬほどにとをく見えわたりたりけるに、みづとりのひゞのてにつ
きてとびわたりけるを

- ⑬しきわたす月のこほりをうたがひて ひゞのてまわるあぢのむらどり (1404)

牛窓の瀬戸での詠作2首（後掲⑳㉓）を、川田氏は西下中のものとし、三好氏、窪田氏は、往返いずれの折のものか不明であるとみているが、これは帰路の詠作と決すべく、そのことは後述する。

近世初期に陸繋化した現在の児島半島は、もちろん西行の当時は、大きな島であった。⑦⑧⑨は、その児島での詠作である。⑦は若いころ修行で訪れたことのある八幡社を再訪しての吟。場所はどこかわからないが、⑧がある浦での詠作、⑨には「ひゞ、しぶかはと申す方にまはりて」とあることから考えると、児島の東北の方から浦伝いに東岸を南下し、日比・渋川の浦に至ったものと思われる。日比・渋川は、讃岐国（現在の五色台）の先端を指呼の間に望むことができる位置にあり、大槌島・小槌島が飛び石のように海上に浮かび、舟

航の恰好の目標物とされたはずである。都を10月10日過ぎに出発したとして、ここに到着したのは11月に入っていたであろう。「風あしくてほどへけり」とあるのは、厳冬の季節ではあり、強い西風が凧ぐのを待ったのであろう。

川田氏も三好氏も、讃岐行の往路に塩飽での詠作（後掲^⑩^⑪）がものされ、そして^⑬の三野津での歌が詠まれたと見ている。つまり三野津に讃岐上陸の第一歩をしるし、しかる後に松山、白峰、善通寺の順序に巡拝したとみるのである。窪田氏や久保田氏は、四国への上陸地点は松山の津であったと考える方が、地理的に自然であるとされ、そうみる考え方が現在の一般的趨勢であるといつてよい。私もそれに近い見解をもつのであるが、若干異っている。冬期、この備讃瀬戸は、大体において西よりの風の吹く日ばかりで、東からの風や南風はまず考えられない。悪風について出航すれば、西ではなく逆に東の高松方面へ流される確率の方がはるかに大である。潮の流れも早い所ではあるが、風とは逆の潮流だけで、塩飽諸島を経て三野津まで西方に流されるといったことは到底考え難いし、意図的にそういう経路をとったとは、なおさら考え難い。三野津に四国上陸の第1歩をしるしたとする見解は、完全に否定されねばならない。^⑩^⑪の塩飽での商人を歌った歌から感じられる、のどかな陽光につつまれた温暖な雰囲気は、厳寒の冬期の季節感とあわないことも、一傍証としてよいであろう。何よりも三野津に着けば、先に善通寺へ行つたはずである。

しかし、だからといって、日比か渋川から船出をして、松山の津に上陸したと考えていいとも思えない。^⑩の詞書は「まつやまのつと申所に」とのみで^⑬の詞書のように、「着きて」とはない。三野津では確かに海上からそこに着いたのであるが、松山では、別の場所に一旦上陸して、陸上を移動して松山の津という所に至った、ということの意味する筆致であるとみるべきではないかと考えるからである。伝承をむやみに援用することはさしひかえねばならないが、現在の坂出市大越町に西行庵居の跡があり、鎌刃峠を越えて白峰の麓に至ったと伝える。『撰集抄』の「讃州白峯之事」に出てくる「讃州み^{林イ}を坂の森と云所」とその話に基く伝承であるらしく思えるが、日比・渋川から讃岐を目ざして渡ってきて最も近い位置がここ（木沢瀉を入った奥にある）であること、および松山の津に至るには、大きく二つの岬を迂回してかなりの距離になることを思う

と、一概にこの伝承を否定し去ることはできないと思う。西行は松山の津に上陸したのではなく、別の場所（おそらくは大越のあたり）に上陸し、少しく陸行して松山の津に至ったのだ、とこの詞書を読みとりたのである。

⑩と⑪は、「八月十日既に讃岐に着せ給ひたりしかども、御所も未作出さざりければ、この在庁散位高遠が松山の御堂へ入奉たりと、請文を都へ奉る」（『保元物語』）、「八月三日松山の津に御下着あり、在庁野大夫高遠が御堂におきたてまつりて、三か年をぞ送りましたまふ」（『白峰寺縁起』）などと伝えられる、松山の津のどこかで仮住いされた崇徳院の行在所跡を訪ねての吟である。ここにいう松山の津が現在のどのあたりを指しているのかはよくわからないが、綾川の河口から以北、大屋富町高屋町あたりの海岸のどこかではあったろう。西行は次いで白峰山上の御墓に詣でて⑫の歌を手向け、崇徳院の霊を鎮魂した。

かくて、崇徳院の遺跡を訪い御墓に参拝するという所期の目的の一つは、これで果されたわけであるが、ここでの詠がたった二首しか残されていないことからみても、西行讃岐行脚の主目的はこちらにはなく、次なる善通寺にあったことは明らかである。その点は川村氏が先行説を整理し主張しているとおりで⁽⁵⁾ある。

ともあれ、西行は次なる目的地善通寺を目ざしたはずである。白峰から陸行して善通寺に至るには、30 kmにも及ぶ道りを歩かねばならないし、途中に山地（額坂峠）もある。しかも予想されるその途次のどこにも西行関係の伝承の存在を聞かない。加えて、⑬の歌の存在から、西行は松山の津から再び乗船して、海岸線に沿って西の方角を目ざし、善通寺に最も近い三野津に上陸した、と私は考える。「さぬきのくにへまかりて、みのつと申つにつきて」の書き方が、船で海上からここに至ったことを明示しているし、歌の内容である、澄明な月明の下に味鴨が群れ飛んでいるという冬季の情景が時期的に合致する（「あぢ」「あぢむら」は冬の季語）からである。三野津到着は、だから、おそらく11月15日前後のことであつたと推定できるであろう。

現在の三野津湾は、江戸時代初期に大規模な干拓が行われた上、最近もどんどん埋め立てられて昔日の様をしのぶよすがもないが、古くは大きく滲入した浅海であつた。現在も東浜・西浜などの地名が湾内奥深くに残っているあたり

までは確実に海だったのである。⁽⁷⁾ 箕がしつらえられ、水鳥が群れ飛んでいたというもうなずける浅海としての情景である。その三野津から鳥坂峠を越え、地図上の直線距離にして5kmほどのところに善通寺はあり、曼荼羅寺や庵居あとと伝える場所はもっと近いところに位置する。

ちなみに⑬の歌の箕の手は、「ノリひび」と解する(川田氏)むきもあるが、ノリひびはこの当時まだなかったはずだから漁撈用のひびと⁽⁸⁾みななければならない。⁽⁹⁾

3

善通寺とその近傍における詠作は、以下のとおりである。

おなじくに、大師のをはしましける御あたりの山に、いほりむすびてす
みけるに、月はとあかくて、うみのかたくもりなく見えければ、

⑭くもりなき山にてうみの月みれば しまぞこほりのたえまなりける (1356)

すみけるまゝに、いほりいとあはれにおぼえて

⑮いまよりはいとほじ命あればこそ かゝるすまひのあはれをもしれ (1357)

いほりのまへに、まつのたてりけるをみて

⑯ひさにへてわが後のよをとへよまつ 跡しのぶべき人もなきみぞ (1358)

⑰こゝをまたわれすみうくてうかれなば まつはひとりにならんとすらん

(1359)

ゆきのふりけるに

⑱まつのしたはゆきふるをりの色なれや 皆白妙にみゆる山ぢに (1360)

⑲雪つみて木もわかずさく花なれや ときはの松もみえぬ成けり (1361)

⑳はなとみるこずゑの雪に月さえて たとへんかたもなきこゝちする (1362)

㉑まがふいろはむめとのみゝてすぎゆくに 雪のはなにはかぞなかりける

(1363)

㉒をりしもあれうれしく雪のうづむ哉。かきこもりなんとおもふ山ぢを(1364)

㉓中々にたにのほそみちうづめゆき ありとて人のかよふべきかは (1365)

㉔谷の庵にたまのすだれをかけましや すがるたるひのゝきをとぢずは(1366)

はなまいらせけるをりしも、をしきにあられのちりけるを

⑳しきみをくあかのをしきのふちなくは 何にあられの玉とちらまし (1367)

㉑いはにせくあか井の水のわりなきに 心すめともやどる月哉 (1368)

大師のむまれさせ給たる所とて、めぐりのしまはして、そのしるしにまつ
のたてりけるをみて

㉒あはれなりおなじの山にたてる木の かゝるしるしの契ありける (1369)

又ある本に

まんだらじの行だうどころへのぼるはよの大事にて、手をたてたるやうなり、
大師の、御経かきてうづませをりましたるやまのみねなり、ぼうのそ
とは一丈ばかりなるだんつきてたてられたり、それへ日ごとにのぼらせお
はしまして、行道しをりましたけると申つたへたり、めぐり行道すべきやう
に、だんも二重につきまはされたり、のぼるほどのあやうさ、ことに大事
なり、かまへてはひまいりつきて

㉓めぐりあはんことのちぎりぞ有^うが^また^き きびしき山のちかひみるにも

(1370)

やがてそれが上は、大師の御師にあひまいらせさせをりましたるみねなり、
わがはいしさとその山をば申すなり、その辺の人は、わがはいしとぞ申な
らひたる、山もじをばすてゝ申さず、又、ふでの山ともなづけたり、とを
くてみれば、ふでにてまるまると山のみねのさきのとがりたるやうなる
を申ならはしたるなめり、行道どころより、かまへてかきつきのぼりて、
みねにまいりたれば、師にあはせをはしましたる所のしるしに、たうをた
ておはしましたりけり、たうのいしずゑ、はかりなくおほきなり、高野の
大たうなどばかりなりける、たうのあとゝみゆ、こけはふかくうづみたれ
ども、いしおほきにして、あらはに見ゆ、ふでのやまと申なにつきて

㉔ふでの山にかきのぼりてもみつるかな こけのしたなる岩のけしきを(1371)

善通寺の大師の御影には、そばにさしあげて、大師の御師かきぐせられた
りき、大師の御てなどもをはしましき、四の門のがく少々われて、おほか
たはたがはずして侍き、すゑにこそいかゞなりなんずらんと、おぼつかな
くおぼえ侍しか、

⑭から⑳に至る 13 首は、善通寺近傍の山に庵居中の詠作である。西行庵居の

あとと伝える場所は、善通寺の西方にある曼荼羅寺のさらに西南、五岳山の一峰火上山の北麓にのびる尾根の中腹にある。『今古讃岐名勝図会』の多度郡吉原村の項中に、「水茎岡 曼荼羅寺の傍にあり。西行法師の旧跡又山里庵と云。曼陀羅寺を西に趾る五六丁に松岡某の別墅あり。其庭園は即ち西行法師が四国行脚の際一時草庵を結びて仮寓した水茎の岡の旧跡である。」とみえる。松岡某とは、松岡筆海で、『山家集抄』の著者固浄と親交あった人物という。

ここにいう水茎岡の山里庵からは、しかし、雨霧山(300 m)、弥谷山(381 m)にさえぎられて、北望しても瀬戸内海を見ることはできない。もっと高い山中にあった庵のあとを、松岡筆海が自分の別墅まで下してきたのではないかと推測する郷土史家もいるが、それは大いにありうることだと考える。ただし、かなり高い位置であっても、雨霧山、弥谷山越しに、瀬戸の海に浮ぶ島々を見ることは難しい。おそらくこの歌は、現在の山里庵からさらに尾根を南にのぼり、鳥坂峠(65 m)よりも高い位置にあった庵から、西の方三野津瀉を望見しての詠作であったにちがいない、と思量する。三野津に来て初めて詠んだ⑬の歌と同じ海を詠んだ歌であったことが、それと相似た発想をとらせ、同じ朗詠詩句(「秦田之一千余里 凜々氷舗」240)を典拠にとる詠作となったのだと確信するからである。

庵そのものへの愛着を歌い(⑮)、庵の前に立つ松への親愛の心を詠む歌(⑯⑰)の存在などから、人里から隔絶し、人との交りを絶った孤絶の生活を西行は送っていたと推察される。雪を詠んだ連作(⑱～㉔)、谷川の流れに闕伽をくんでの詠(㉕㉖)の背後にも、同じように厳しい生活が見えかくれしている。生活というより、厳しい修行であったらしく思えるのであり、人跡たえた雪の山中に、西行はひたすらかき籠り仏に仕えていたのであろう。

㉗㉘㉙の3首は、庵居に入る前に、大師ゆかりの善通寺の誕生所に参詣し、我拝師山に登攀した折の作品であろう。庵に落ちついてから、おもむろに参詣し、大師が捨身修行をした行道所と我拝師山に登ったという順序ではあるまい。善通寺の地を訪ねて、まず最初に寺に参詣して誕生所を拝し、大師が修行中奇瑞にあった山に自らを駆って登ったにちがいないと考えたいのである。

㉚の詞書中に、我拝師山の別名が筆の山だと誤解し(我拝師山のすぐ東側の

一峰が筆の山), その誤解に基いて機知の歌を詠んでいるところをみても, また文章全体に横溢する勢いからも, まだ土地に対する十分な知識も得ぬまま, 取るものもとりあえず登攀して, 真言の始祖弘法大師の行跡に自らを重ねたかたにちがいない西行の心の昂ぶりを感じとることができる。左注に若干の描写はあるものの, 寺の様相を特記せず, 大師誕生の場所が松一本によって示されるだけの善通寺の寺そのものよりも, 大師が修行した曼荼羅寺の行道所と我拝師山こそが, 西行讃岐訪問の主目的にほかならなかったのである。

ちなみに⑩は、『西行上人集』の詞書「土佐の方へやまからましと, 思ひ立つ事侍りしに」をとって, ⑮と同時の作とはみないとしても, 同じ山中の草庵において時期を接して詠まれた歌であることは明白であるが, 寛元4年(1246)ここを訪れた高野山正智院の高僧道範は、『南海流浪記』に次のごとく伝えている。

十月之比, 南大門ニ出テ, 南方, 名山等眺望ス。南大門ノ前ノ路, 弘サ三丈五尺, 長八町。左右ニ率都婆多ク立シ之。其門ノ東脇ニ古大松アリ。寺僧云。昔西行, 此松ノ下ニ七日七夜籠居テ,

久に経てわが後の世をとへよ松あとしのぶべき人もなき身ぞ
とよめるによりて, 此松をば西行が松と申也と申を聞て, (下略)

西行が訪れて約80年後には, すでに西行庵と松が南大門のすぐ近く(現在の玉泉院の場所という)に比定されていたことがわかる。寺僧の語ではあり, 寺門の脇とする点においても, おそらくは善通寺当局の宣伝誇示を旨とする力が介在しての名所捏造であったかに思われるが, とまれ, ここにすでに伝説化されてゆく西行像の, その伝説化のメカニズムの一端を垣間見ることができて興味深い。

4

西行が曼荼羅寺に近い山中に庵居して滞在した期間はどれくらいであり, その後の行程はどうであったか。川田氏は「弘法大師誕生地の善通寺に巡礼し, 其辺に草庵を結び, 年(仁安二年)の暮まで居たらしい」「年末(仁安二年)讃岐より内海を西航して九州の一角を踏んだものらしい」といい, また「仁安の

旅行に安芸一の宮の歌はないけれども、参拝したことは疑問の余地がない。有名なる厳島平家納経は仁安二年十一月十八日満願して奉納せられたのだから、西行は讃州から筑紫への往復いつれかに必ずこれを一見したに相違ない」という。年末まで善通寺に滞在し、厳島・筑紫へと旅したあと帰洛という旅程を考えるのである。三好氏は、「同様に四国行脚を終へた西行のその後の行動も不明瞭である。ただ、川田氏が推定されたやうに、四国行脚の後には再び中国筋に出て、厳島明神に参拝したらしいことは、その折の歌はないが、略々信じてよいやうに思はれる」と、宮島行には讃意を表し、筑紫行脚説は否定する。その推論の中での言だが、「最も短く見積っても十日以上二十日の讃岐滞在を想定しなくてはならないだらうから、従って、十一月末乃至十二月上旬頃までは四国に在ったものと考へなくてはなるまい」とされる一方、ここらの叙述に関する注五において「思ふに、西行は四国に数ヶ月滞在し、ここに越年し、更に中国路に出で、その年の中に帰ったのであろう」と考えている。窪田氏や久保田氏も宮島参詣まではありえたことと認める立場をとるが、総じて筑紫行想定には否定的である。

しかし、筑紫行はもとより、承認する研究者の多いその宮島行にしても、確実な証拠を何一つもたない、情況証拠のみを根拠とする川田氏の推測に発する説で、しかもその情況そのものの認定に疑義がもたれていることを閑脚してはならない。私はむしろ、帰路西行はどこへも寄り道することなく、まっすぐ帰洛していったとみる方が妥当であると考え。それは、以下の歌の存在によってである。

まなべと申嶋に、京よりあきどものくんだりて、やうやうのつみのものどもあきなひて、又、しはくの嶋にわたり、あきなはんずるよし申けるをきゝて

⑩まなべよりしはくへかよふあき人は つみをかひにて渡る成けり (1374)

くしにさしたる物をあきなひけるを、なにぞとゝひければ、はまぐりをほして侍なりと申けるをきゝて

⑪おなじくはかに(「き」ノ誤カ)をぞさしてほしもすべきはまぐりよりはなもたよりあり

(1375)

うしまどのせとに、あまのいでいりて、さだえと申ものをとりて、ふねに
いれいれしけるをみて

㊸さだえすむせとの岩つぼもとめで、いそぎしあまのけしき成かな(1376)

おきなるいはずにつきて、あまどものあはびとりけるところにて

㊹いはのねにかたおもむきになみうきて あはびをかづくあまのむらぎみ

(1377)

これら一連の歌は、以下に述べる季感から明らかに行程の順にならんでいる。
『山家集』所収歌は、ばらばらでまとまりを欠く場合ももちろん多いが、先の
善通寺での詠作のように、部分的にはまとまっているところも少なくなく、少
なくともこの部分も一連の歌とみて誤らない。

西行が善通寺近辺での庵居を切りあげて讃岐を離れた場所も、善通寺へ来た
時に第一歩をしるした近くの三野津であったはずで(窪田氏もそう考えてい
る)、そこで便船を得て船出する。そして、真鍋島のとある港に至り、来あわせ
た都の商人たちに逢って、㊸㊹の2首を詠む。その後、おそらく本島その他塩
飽の島々を伝って対岸の児島へ渡る。地理的位置から考えて、今度は児島の西
岸を目ざしたに相違なく、そこから島の南北いずれか回りで(おそらくは北の
瀬戸を通して)東行し、再び牛窓の瀬戸を經由して帰洛していった、という行
程がたどれるのである。この4首を一連の歌とみる限り、さらに西下して宮島
や筑紫を目ざしたとする説は否定されねばならない。

さて、㊸の歌に詠まれる「さだえ(さざえ)」は、俳諧では春(三春)の季語
として扱われているし、「サザエの産卵期は夏で、春から初夏にかけてが旬であ
る。昔から三月三日の雛祭にはサザエの壺焼きが供されるが、ちょうどこのこ
ろ味がもっともよい」ともいう。また㊹の歌に詠みこまれている「鮑」また「鮑
取」は夏の季語である。とすれば、西行が牛窓の瀬戸を通過した季節は、海士
たちがサザエやアワビを採っていた季節、つまりは春から初夏にかけてのころ
であった、ということになる。常識的にいっても冬季の潜水漁は考えられない
から、これは往路の詠作ではありえない。

牛窓に至る前の、塩飽での作品には、とりたてて季節を感じさせる語はなく、
蛤が三春をかねる季語(カキは冬)であるくらいだが、ここに登場する商人た

ちの上には、明るく暖かい陽光が降り注いでいるように感じられる。これらもまた春の季節に詠まれた歌であって、少なくとも冷い西北の風が吹く瀬戸内の冬を感じさせる歌ではない。

そのように考えて、時間を遡ってくと、西行が善通寺近傍の庵を離れたのも、春になってからであったと考えざるをえない。三好氏が指摘するように、善通寺での歌はいずれも冬の歌ばかりであり、残された歌から越年したという証拠を求めることはできないけれども、西行は一冬を曼荼羅寺近くの庵で過ごし、翌春暖かくなってから帰洛の途についたものと思量されるのである。滞在期間に限っていえば、三好氏説とはほぼ一致することになる。

おわりに

以上、歌そのものよりも、歌の詞書を中心に、若干の歌についてはその季感や表現に注目して、西行四国旅行の経路をたどってきた。些事にわたることではあるが、事実として解明されるに如くはないことではあるし、現地近くに住む研究者の責務であるとも考えて、あえてこのような形の論として成稿した。提示したかなり多くの新見に対し、忌憚のない批正を期待したい。

〈注〉

- (1) 川田順『西行の伝と歌』（昭和19年11月、創元社）。以下、川田説はすべてこれによる。
- (2) 三好英二「西行の西国行脚に就いて——人間性深化の一契機としての四国行脚・筑紫非行脚説——」（新註国文学叢書『西行歌集』（下）昭和23年11月、大日本雄弁会講談社、付載論文）。以下、三好説はすべてこれによる。
- (3) 窪田章一郎『西行の研究』（昭和36年1月、東京堂出版）。以下、窪田説はすべてこれによる。
- (4) 久保田淳『新古今歌人の研究』（昭和48年3月、東京大学出版会）。以下、久保田説はすべてこれによる。
- (5) 川村晃生「西行の四国下向——大師遺跡巡礼歌群について——」（『三田国文』1号、昭和58年1月）。
- (6) 久保田淳編『西行全集』（昭和57年5月、日本古典文学会）の翻刻本文による。
- (7) 高桑紘「三豊地域の地形と災害」（『香川大学教育学部研究報告』第1部43号、昭和52年10月）に、「三野町の浅津・砂押・出井・下原・西浜・津の前・田中・汐木を結ぶ線から海

岸寄りは三野津新田の干拓地で、1650（慶安3）年から1689（元禄2）年に造成され、新田地割が卓越している低湿地なのである」とあり、地図も添えられている。

- (8) 「この〔箕による〕ノリ養殖は日本特有の技術で、日本で独自に始まり日本で栄えている産業である。しかし始められた年代や場所などは正確にはわかっていない。おそらく約280～290年前、江戸時代の初めころ、今の東京都の品川から大森あたりまでの海岸のどこかで始められたのであろうといわれる。」（平凡社『世界大百科事典』1967年版、新崎盛敏執筆）。
- (9) 「ひび〔箕〕 浅海に柴や竹箆などを立て並べ、一方に口をあげ、満潮時に入った魚を干潮時に捕える漁業施設。また、海苔や牡蠣を付着させるため海中に立てておく粗朶。」（『日本国語大辞典』）
- (10) 梶原藍渠著、梶原竹軒補訂『今古讃岐名勝図会』（昭和5年10月、高松製版印刷所）。
- (11) 『日本大百科全書』10巻（小学館、昭和61年7月）「サザエ」の項（矢野憲一執筆）。

〈付記〉 本稿は、昭和61年度総合科目「瀬戸内の風土と文化」の中で、11月28日と12月5日に講義した内容の1部を骨子としている。